

SIMAC

75 夏から初秋の
個人山行報告

信州大学山岳会
伊那松本山岳部

〔北鎌尾根千丈沢側より滝谷・奥又 7/4~19〕

西本真一(AI-2)、師田信人(M2-2)

7/14、① 松本→大町→葛温泉B.P.

午後の電車と梅雨明け前の松本を後にする。葛温泉にて星空を仰ぎながら野宿。

7/15、②のち① B.P.(3:15)→東沢出合(5:45)→湯俣(7:55)→
→千天出合(11:45)→千丈沢六の沢出合(15:20)

2:45起床。真暗な道をひたすら歩く。トンネルの長さにあきけながら歩き続けるうちいつしか夜が明け、それと共に雨も本格的となった。湯俣では暫く雨が弱まるのを待つ。湯俣から千天出合まで、そして六の沢出合までは実に道がひどかった。千丈沢に入ってから雨もあがり青空が見え出す。六の沢出合には開けた明るい、なかなかいい感じのところ。大檐・小檐が目新しく感じられた。

7/16、③のち① B.P.(4:40)→face A稜→北鎌平→檐ヶ岳(11:25)→北穂南稜テラスB.P.(17:25)

「ガスって檐も見えず、昨日スカイラインを成していたA稜もはっきりしないまま見当をつけて雪溪をつめて行く。岩小屋小根を右からトラバースし大岩の下から尾根状に取付く。青空が拡がり目の前にB稜のピナクルらしきものが見え、とにかくA稜にいたことを確認し登り続ける。ザイル1セリでIII級(9:00-9:30)。北鎌尾根をよわよわになつて檐までたどりつく。北穂までは死にそうにエラかった。水もなく南稜で「米とお茶漬の素をボリボリ食う。

7/17、④ 沈殿。みじめ。ウェルト1張、全身ずぶ濡れとなる。テント内にたまつた水で1ドめ渴きをいやしくを得る。

7/18、⑤ B.P.→クラック尾根(12:50)→白出のゴル(15:00)

長くも寒い夜が明けると、ナトじつ晴れだった。小屋ではレイジャーに大成功。これでクラック尾根登攀の希望が出てくる。クラック尾根7ピッチコンテ1ピッチ(9:00~11:25)。faceごとのクラックの処理で結構楽しかった。その後、今日は白出のゴルまで日とって北穂に後にする。

7/19、⑥ B.P.(5:45)→奥穂(6:15)→前穂(7:40)→北壁Aface→前穂(12:55)→岳沢→S.T.(17:00)

3000mでの野宿はさすがに寒かった。2人ともツクなしで陽がよって暖くなるまでウェルトがぶつてる。白出の小屋では又してもレイジャー成功。世の中には神様みたいな人が多しもんだ。余勢をかって前穂まで突走る。3,4のゴルから下降。C沢上部にて2人で水を2リ近く飲みます。北壁コンタクトは実にしょはく嫌らしい。1ピッチ目はも3く、吊り上げを要す。ハーケン1本残

置。2ピッチ目、ビナのかけ替えからハングした凹角、いやなトラバース。この後簡単な2ピッチでAfaceに出る。Afaceは川原を待ち、馬に力足で前沢に抜け出る。(10:00-12:55) 前沢からは恐れ鬼いしながらやっこのことで岳沢に降り立ち長い長い道を上高坂へ。河童橋で念願のビールで乾杯。

(師田記)

《黒部川上の廊下湖行 8/9~14》

福井修(T3-2)、小川邦一(T4-4)、師田信人(M2-2)、

8.9.◎ 松本~~ニ~~大町~~ニ~~扇沢—大沢小屋手前

8.10.① T.S.—針の峠—平の渡—東沢出合

8.11.○ T.S.—下の黒ビンガ—黒五—上の黒ビンガ手前

8.12.①^{as}◎ T.S.—上の黒ビンガ—立岩—薬師沢出合付近

8.13.① T.S.—薬師沢出合—赤木沢出合—三俣蘆葦小屋

8.14.○ T.S.—双六岳—梶の肩—S.T.

(報告詳細はSNAC報告書参照)

〔剣から穂高へ〕 7/16 ~ 7/24

し須貝、二俣、清川、片山、細野

7月16日 ①のち◎

松本 ~~二俣~~ 大町 72% 扇沢 トリ 黒四 (8:40)

—内蔵助平 (12:40) △

前日までの大雨で黒四の下の橋は流れされたとの
ことであたかも、けこうしかりした橋がかけてあった。
バテバテながらもなんとか内蔵助平へ

7月17日 ◎

△ (5:30) — ハシゴ段乗越 (8:30) — 真砂沢小屋 (11:00)

— 長次郎の岩小屋 (13:00) ここを剣にあけるB.Cとする。

昨夜の雨で内蔵助平からハシゴ段乗越までは
川の中を歩くようなものでした。

7月18日 ○のちカス

B.C (5:30) — 長次郎雪溪にて雪上訓練のち六山峰Cフェース

登攀 2 party に分かれて

〔剣稜会ルート T=二俣—清川 取付 7:40 — 8:55 終了〕

〔R.Cルート T=須貝—片山—細野 7:40 — 9:05〕

Cフェースの豆頭で合流ののちハッ山峰縦走—剣の豆頭—

— 長次郎雪溪左俣をグリセート—B.C (13:00) (11:30)

Cフェースは先行10-ティもなく楽しい登攀でした。

7月19日

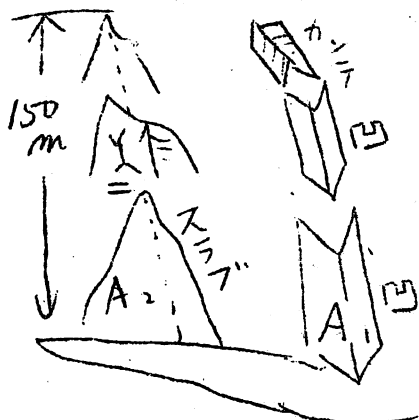
B.C (5:30) — 長次郎雪溪を下り、平蔵谷を登る—こじり
210-ティ

に別かれて本山峰南壁登攀

〔A1 T=須貝—清川—片山 取付 7:50 — 終了 9:20 (頂上)〕

〔A2 T=二俣—細野 取付 7:50 — 終了 9:30 (〃)〕

頂上で合流のち長次郎谷左保をグリセードで B.C.
B.C 徹夜後、別山平 (14:00)



A1 稜 岩石硬く、快適。

ザイルピッチ 3~4ピッチ

A2 稜 岩石硬く、快適

ザイルピッチ 3~4ピッチ

上部のリッジは石が積んであるだけで落石しそう
でこわかった。

7月20日 ①のち②

△ (5:30) — 立山をへて — 五色ヶ原、30分休ケイ

— スゴの夏更 (15:00) 1時間休ケイ — 間山 (19:20)

縦走初日、バテバテ死ぬかと思った。△

7月21日 ② 途中小雨

△ (6:30) — 薬師岳 (09:00) — 太郎平 — 薬師沢出合

— 雲の平 (15:00) △ ウィスキーをのむ。

7月22日 ①

△ (9:20) — 三保ヶ岳、双六岳をまいて双六の池 (14:00)

7月23日 ①のち② =

△ (6:30) — 槍ヶ岳 (10:00) — 北穂南稜 (14:00) △

大キレットの登りより雨、南稜ではツェルトをかぶり

ブルブル震えながらソーセージを食べた。のちウィスキー

7月24日 ②のち③

△ より滝谷登攀 { 三尾根 T 須貝 — 片山 — 細野

南稜で合流のち 白出の科尔 (13:30) — 岳沢ヒュッテ

— 峠 T (19:30)

白出の科尔より雨。白出の科尔でウィスキー。峠 T まで

ひた走り。五千尺にてヒールで完走を祝ひ乾盃。

上高地からみじめな姿で、下を向いてゆっくり峠 T へ。

夏山北アルプス縦走報告

1975. 7.17 ~ 7.25

メンバー C.L. 村田卓穂

S.L. 土田 章

下田 章

梶巻 皇幸

7月17日 ● ~ ◎

松本(6:00) 平岩(8:50) — 蓮華温泉(11:00) — 白高地沢(14:30)
小雨の中に出発。新川ではモッコ橋を渡る。白高地沢手前で梶巻がぬかるみに足をとられて足首を痛める。白高地沢まで荷を置いて行かせ、渡渉して設営。

7月18日 ①

T.S.(4:35) — 朝日岳(10:00) — ツバメ平(12:15)
さやけき星の下に目覚める。梶巻、足首の調子悪く荷を減らす。カモシカ坂にはミズバネヨウガ咲き替り、花園三角点ではワタスゲが揺らめいていた。ようやく辿り着いた朝日岳では視界悪く、おまけに吐きすきばれる。夕月がざした雪倉岳がガスの合間に明日を誘う、ツバメ平の冒だった。

7月19日 ①

T.S.(4:25) — 雪倉岳(5:50) — 白馬岳(8:55) — 白馬鏡(11:15) — 天狗小屋(12:48)
今日もきれいな残り星に明ける。それだけに朝方は冷え込み、金ヶ岳を過ぎてても氷が張っていた。このあたり、ライチョウの花道に甘えたりなんかもした。みんな大量に水を飲んでいるのだが不思議とバテない。

7月20日 ①

T.S.(4:30) — 天狗岳(4:50) — 唐松山荘(7:31) — 五竜岳(10:37) — キレット沢の
コル(13:40) — 鹿島吊尾根(16:15)
不帰/嶺途中より現われた、KyotoのHyakutakeなる漂泊者に終日付きまとわれる。行く先々で、優雅にも旅ゆく雲を眺めながらの昼寝なんぞとシヤしており、大いにあせらされた。うらやましい限りだった。キレット沢のコルでの設営を常駐隊に告められ、やむなく意識もうろうの梶巻が荷をわけしてキレットを越え、ようようの思いで吊尾根に辿り着く。

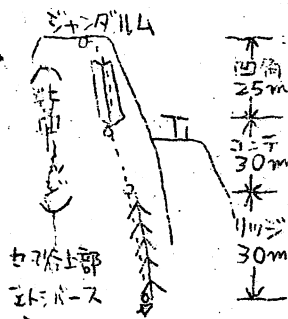
7月21日 ◎

T.S.(6:35) — 鹿島槍(6:50) — 冷池(8:05) — 爺ヶ岳(9:40) — 岩小屋沢岳(11:25) — 新越小屋(12:12) — 鳴沢岳(13:05) — 赤沢岳(14:10) — スバリ岳手前(16:02)
鳴沢岳を過ぎてより、梶巻アキレス腱を痛め、赤沢岳あたりより一歩前進にも困難を来す。やむなくスバリ岳手前の空地で設営。

【明神より奥穂へ】 7/30~31 二俣勇司(Lt2)、師田信人(Mt2)

7/30、○のち○のち◎ S.T.(5:45) — 宮川のコル(8:20) — 明神4峰東稜 — 4峰(12:25) — 主峰北側のコル(14:35) — 奥明神沢下降 — 岳沢天狗沢出合(17:15)
2峰の下りはabsailen 2回。時刻遅く、又A沢の降り口がわからなかったため4峰19峰は中止。4峰東稜取付(8:55)

7/31、○のち◎ B.P.(6:05) — 奥穂南稜取付(7:05) — 奥穂(11:10) — ジャンダルム北面リッジ(13:45) — 天狗沢 — 岳沢(18:00) — S.T.



凹角でトップ二俣が落石し師田負傷。
(事故報告書参照)

【開風・奥・滝谷 7/31~8/2】 吉田秀樹(L4.4)、須貝与志明(A3.3)

7/31、○ S.T. — 横尾岩小屋 B.P.

昼からS.T.を出て岩小屋まで。失着P1。

7/31、○ B.P.(5:00) — T4(8:30) — 終了点(10:30) — 3.4コル(14:30) — 右岩稜取付(15:20) — 終了(16:10) — Dface取付(16:40) — 終了(18:35) — 3.4コル(19:15)

結局夜が白の始めた頃起き出し5:00出発となって(まあ、T4尾根はザイル2ピッチ使用、意外にしゃがみかけた。T4で淵沢から来た先行Pのため1時間待たされ出発。先行Pあまりに遅く崩岩テラスを交替してくれた。終了後のやぶこぎも踏跡ばかりしていて楽だった。暑さで汗で汗ながら北尾根を登る。3.4のコル着2:30。こういう山行を早くこぎ張ってはヒマなのど仕方なく東壁も登ることにする。超常早 E.S.S.E.N 具をデポし出発。北壁はア、ガサレにするがクライミングダウンも可能。なしかホルトの見えるうちに Dface も抜けた。星空を眺めながら外で E.S.S.E.N をつくった。

8/2、○ B.P.(6:25) — 前ホー — 奥ホー — 北ホー小屋(9:45) — F275 早大取付(11:10) — 終了(12:05) — 淵沢(13:40) — S.T.

昨日大所がせいだの今日のはっきり起きる。今日もまた稜線歩きには苦められた。時間的には快調に来る。滝谷を1本だけにしておいたの一方では悔やみ一方では喜びながら予定より1日早くS.T.へ下る。晩飯に間に合った。

〔置岩より滝谷 8/4~5〕 山本 章(E1.2)、岡本 真一(A1.2)

8.4. ① S.T.(6:00)→湯島取付(9:00)→終了(11:00)→奥木(12:10)→
→北小車積テラスB.P.(15:00)

置岩中央ルンゼ左方のスラウを1-ザル。酒沢、北穂間混雑、時間待煩
雑。B.P.に荷をデポして、中央積産場のため3屋根下降へは3ツとしたとき、
登ってくるP.から数P.10人余が取付にいるとき、諦めてB.P.へもどる。
北小小屋より金ピル2本いただく。

8.5. ② ^{山本}B.P.(7:20)→1屋根取付点(7:40)→終了(12:30)→B.P.(
13:30)→酒沢(14:20)→横尾(16:00)

取付黒山のムネダカリを待つ。取付11で少し登って待つ。また少し登って待つ。
Bface下のテラスではザルはすいて日向ぼっこ。待ち時間の方がよほど長かった
ような気もする。あんまり登れた。A1は不要。1屋根で時間を食った
ため、2、3屋根のうもにぎやかだったので、ドーム中央積はやはり諦め下山。

(岡本 記)

〔屏風岩中央カ行〕 須貝 与志明(A3.3)、岡本 真一(A1.2)

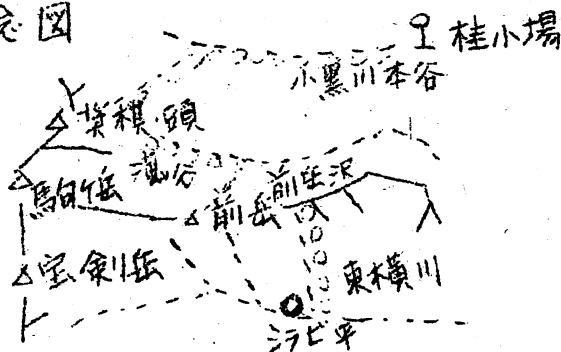
※ 雨天と日程の都合のため中止しました。

◎ サマーテントからの小山行については、S.T.委による報告書に記載
される予定です。

中央アルプス沢登り 8/3 ~ 8/5

(1) member △福島渉 渡部光則 井上雅子
下田章 付々人 高橋雄治

(2) 概念図



(3) 行動記録

8/3 伊那市 ~ 馬向ヶ根 ~ シビ平 ~ 東横川 ~ 源頭 稜線
9:05 13:20

前岳沢下降 ~ 伊勢滝の午前ノ広場 (野宿)
15:25

①→⑩ 最初の方はかなり沢があれいて土積量が多かった。途中(東横川)に3回ぐらい頭が氷をかぶらなくてはならないところがあった。ほぼスムーズに登れた。前岳沢は稜線上を少し歩き適当なところから下降。だんだんワラジがいた。ついに一足だめになってしまった。

8/4 伊勢滝 ~ 滝谷 ~ 源頭 ~ 葉根頭 ~ 小黒川本谷
6:35 10:50 15:00 下降
桂小場 (テント)

① 伊勢滝を巻き、その他土高巻きをいられながら快適な沢登りを楽しんだ。途中ギアールを使用したところヶ所。お昼をのんびりとすごした後、葉根頭まできついハイマツのやぶこぎ。小黒川本谷下降はむづかしく巻きながらおれた。最後のトップギアールのみのギアール使用

8/5 下8 ~ 伊那

動終了。

9日、晴れ。朝、ねむけのためやらぬ暖かい素足に、冷たい地下足袋をはくのは苦痛である。この沢は滝かと2も3もなく、流水がすくまがりくねっていて、いっていてもカーブ。見とおしがきかない。橋までの徒歩や、水泳、それに谷が深くて日がささないから、ガタガタふるえっぱなし。と2もじっとしてはいられない。9時15分、珍らしい3mの滝。ハーゲンがうってある。ここは、高巻きも不可能だ。ガイルとアグニのように輪にして、確保してもらってよじ登る。日あたりで一本はうれしい。泳ぐには流水の強すぎる細長いふち、長い自けに高巻きに1時間以上かかった、怖い。17時25分までテント張れるような平地は土の場所がなかった。岩壁の谷間を流れる沢水、そんな中氣を心配だった。

10日、夜のうちの雨あがり、きょうも晴。出発後1時間、アグニ内との出会い。この吊り橋とかきいろのテント地の小屋がけ。だんだんまたずいぶん苦しくなる。タイツはぬれるとまっつが大きくなるだろうからと思って、カッパにしみたが、やっぱり濡れる。日本でぬぐいで、ギューとしぼる。10時から12時まで、高巻きに2時間も費す。一度あがってしまうと、今度は沢へ下るのに苦々しくことがよくある。ヒル今天との出会い15分程前に、どうどうと340mの大滝がある。左岸を巻く。ここでカモツカを見る。滝の音で人のけはいが感じとれなかったのだらうか。出会い付近でテントパル。

11日、曇り。遊河内も、さすがにここまできると日がさしこみ、倒木だらけの小さな谷川だ。水量も滝からはなくなって。どちらかという、ヒル今天の方が水が多かった。大木をくぐったり乗り越えたり、やたら倒木が多く思うようにすりぬけない。水量も米もちょうちょう多くなり、3日以上かかったこの沢もとうとう終わりに。このあと、中ノ尾根山まで、クマザサのブツツををかきわけ、そこからは道ぬきぬきするようにして進み、北口岳あたりからは赤

いなりきと導びかれながら、光岳には、12日の午後ついた。13日は、茶臼岳を往復して、諸河内を戻り下った。この沢は、もういつな傾斜と垂つぎまで、何度となくアップザイルをくりかえさせられた。遠山川に降りたのは、14日の4時をまわっていた。沢下りという緊張感から解放されて、心も軽く、足どりもかるく梨元についた。——終—— (箕田俊晴、作。)

行動記録

8/6 松本 ~~→~~ 甲府 ~~→~~ 富士 ~~→~~ 金谷 ~~→~~ 4頭
● — 寸又峽温泉

・ 宮林署に登山届を提出。

/ 7 寸又峽 — 寸又川右岸林道 — 4頭ダム (8:15)
● — 吊橋 (9:00) — 逆河内沢 — 上西河内沢
出合 (10:05・10:30)

・ 出合の河原 (1 Km 弱) にカッパ。

・ 上西河内での出合が少し行くが、テニバの選定を考え、出合までもどり設営。

/ 8 T.S. (6:05) — 白沢出合 (10:30) — 右岩小屋
① (14:25)

・ 下流核心部。

・ 白沢出合まで左岸上部に林道。所々崩壊。

・ へつりてザイル使用 (2回)。

・ 高巻きより *abseilen*。

/ 9 T.S. (6:25) — 右岸洞穴対岸 (17:20)

① ・ 河原 ~ 中流核心。

(7時 - 1時)

《訂正 MEMBER 吉田(L-3)を吉田(L-4)に》

・ 3mの滝(9:15) 右岸よりかすむ。ザイル使用。
荷物つりあげ。

・ コルシュ(12:30) 左岸高巻き。abseilen.

・ (1:30) 右岸をへっりかけてやる。

左岸高巻き。一度尾根上にでる。下降が
悪い。abseilen.

/10 T.S.(7:10) — アケ沢出合(8:45) — 40mの大滝

① (13:45) — ヒウチ沢出合(14:05)

・ 上流核心 左岸を大きく高巻く。

・ 大滝 左岸高巻き。

/11 T.S.(5:50) — ガレ終了・ブッシュへ(8:30) — 中ノ尾根

① 山(9:55) — トサカ山北峰(14:30) — 北峰と池口岳と

② のコル(14:50)

・ 尾根上の道を不明瞭。

・ トサカ山 南峰の下りで迷う。

/12 T.S.(6:05) — 池口岳(8:35) — 加々森山(11:30) — 光岳

① (14:30) — 光岳小屋(14:40)

・ 池口岳の下り、加々森山の下りで迷う。

/13 T.S.(5:40) — 茶臼岳(8:05) — T.S.(10:50~11:45) —

① 2367mピーク(13:25) — 諸河内沢 — T.S.(18:30)

② 諸河内は予想外にしょっぱい。abseilen.

/14 T.S.(9:30) — 二溪(12:55) — 出合(14:15) — 梨元(17:25)

二 子岡 — 伊那八島(吉田・左山・二溪) or 豊橋(藤元・賢田)

・ 滝の連続。abseilen.

$50.9.26 \sim 10.1$

L 吉田秀樹 (L4-4)

下田章(A1-1)

さすがに手強い谷であった。特に高
な。てあり下降の際のセシに苦勞した
案に存すると思う。××ンバー構成は
が激しいと思う。それ以上だと時間か非
実感はあった。後半を白馬北方稜線と
した。少し振りにキンチョウシヌのんびり

まが(1)やらしい。谷身に近い所が急に
40mのアップ。サイレンがでまれば十分
減速していくから141km/hまで2~3人
にかかると危険でもある。それだけに危
なげた事はニハ山行をうるおりのあるものに
下り山行であった。

9月26日@ 松本(11:10)→白=1141 温泉(6:00)-川原設営(6:10)

9月27日(雨) C(5:55)-越前峠(7:35)-北又小屋(8:22)-北又口(9:40)

—カサド×糸出台下注 左岸711 (12=30)

夜半からの雨であるが、ミット降る。又小屋はもう人もいらず、小屋も自由に使用。松子も行く仕方なく先へ進む事にする。言葉によれば、雪氏は数回の徒勞、一時はキムラウギき北又の口が見える。とても通な所であつた。ザイン公園で本城へ出る。それが山からおりなければならず、長を使う。ツリにくり感じを覚えた。又南側の山の中腹、山の裾、真まくには両岸は圧倒崖を以てして、一番自信のある平泳ぎで、左岸の途中から右へハッレそうなので、右岸はいづれがイツかの有事が依り、ハッレをハッレしうと云ふのだ。衣用を充分にあつたので、ウェアをはける。衣サをさしながら、山から先かおもひやられる。

もまゝににかく北ヌ小屋まで行く事にする。北
なる状態であつた。が天気もこれ以上悪化す
曲谷出合まで10回余りの往歩、1時間以内分
り、まあまあである。ここから北ヌ谷の開門と
できそうに百く左岸の小港から取りつく。適當
な川原におちる前の岸が急で下階のセン
スが印象として、今までの谷のなかでも一番ハ
ミ釣釣であり、天気のせいもあり、暗く感じた。
さあ行くと何か足身づたりに行こうと思ふ左
へへへ。それが元におぼれうになる。それだけ
泳ぐ、水も、流れ、ハツル、初めに何と決つて
いた。一丁二丁三丁四丁、最初から底から右岸
へりふる百から先へ進む。適當な天端か
タキを渡して何人とか服をかゆかけた。

9月28日 ②→①→② d(7:00)ー高杉南始(8:30)ー17リ谷に下降(10:05)ー17リ谷に
 下降^{1:25}(~~2:32~~)ー17リ谷出合(2:32)ー17リ谷出合手前100m(2:50)

2. 行程 歩くと大きな口にぶつかった。右岸がほとんどアツいそうだ。はじめて登り気味、中段バ
 ンドに出てそこから下降気味というわり合いもある。前半アツい。後半が×して、ザクザクと別
 々に通過した。トケン3本使用、ニエで下田へ、すぐおりになる。ここからすぐ上流が魚止の
 滝である。左右から交互に張り出した岩鼻の奥からその迫力がするびひまが伝へてくる。ここ
 からは左岸をリゼをつめ、少し登った所から谷沿いに高巻いていく。アツ平を経て、ここから
 記録ではイワリ谷と出合付近に下降しているが、我々は少し登りすぎ、出合より150m位上流の
 イワリ谷の中へ降りた。ここから、左ザイは谷を降った。下向きにはえていく木にリュウノ
 トをかけた。谷内がホリリスができた。イワリ谷を100m位下ると、出合から50m位にある。イワリ
 トをかけた。ここからは結局、ナガノ谷にぶつかるまで高巻をしなければならず、出合
 までおり下りて高巻いていく。熊平をへて、小セツを越え、越えた所で下降に移ったが、どう
 いうわけか、再び谷間にありてしまう。直ぐなほ、右から、左から、降りたナガノ谷へ、P. 1011で
 なりに。一歩、石で、計測、ナガノ谷と上流へあり、少し上へまで、1111内を要した。
 (P. 1011) ここから、再び、アツい谷へ、同程あり、未だに、流した川へ、あるた、アツい
 トを張る。このあたりは、山壁も、それ程でなく、明るい、空、晴である。

9A7"0 ④ → ① 标准

9月30日 0→0 C(5=55)-三ヨ'7' 出合(9=25)-三段滝手前(1=25)-黒岩谷

出合(2=00)-黒岩平付折(15)

ニク谷出合のかまを左岸に簡単にま
りずと早く進む。シヨウゴ谷手前
であり。倦まずぎるとシヨウゴリ谷
長持指は非常に快適であつた。
まどつかり、時にけつたり、両側かろは
というまへか。次の大きな滝はヌモ左
れにのりですぐで認める。冠着
り、3本目の川にせをみる。出合へ
して本流へおるく(125)。ニの少し
ふか新い事をいえてく。三
滝をまきおると右側かろ広く開け
としようは、言葉ではいふれ
かじんで行くのを語りかける様に
きりり草木が少しづつづつくる世
に樂園という感じである。誰か
ツェルトを付けて来た。

どんとどんと音をきかせぐ。昨日までの感傷も
左岸を過ぎ出ると20m位手前へア、フ、ツ
がたり。とてもおもしろいところだ。
30m位つづく階段。深身が三層に。時には
飛沫をあびながら。ミ、ミの夕日味
倦く。二は右岸のルンセまで歩いていて、
「カネツリ」であると思う。左岸のルンセまで
河口はハート型と、土砂に埋れた木々利用
した岩の質が変わり暗い色になる。黒岩谷也
流は今までに比べ、左岸をまける。(いつ?)
今日はいってくる。黒岩谷である。二、Pのホッ
こ。それ、キン張した山行であた。い、太陽
どん高さをかせぐ。谷自体は例えてもいい。
支那付近へ出た。ぱっとなかつ草原はまだ
山で今夜は満天の星の下、シユアラノエ

10月1日 ① $C(8-07)$ - 阿平(8-7) - 蓮華山分岐点(10-10) - 蓮華山(2-25)

バス停(3=00) = 平岩(4=10) 松平(9=30)

今日中に下山の見通しが立っていた。
色づいた草木、残雪、山頂で
宇川からは毎秒通いにきかできて
ぬすまづ、たのしみだ。おもしろい
歩みで歩き出さ。しかし、遅く
らう事ができた。

太陽が沈む途に、一匹の羊、下々果(少)。
朝日昇る。夕陽はしてを。巡入下。
E。二ちの方サけ。至リてハ午キヤ第11。
3:00 日中。日中。バスは行方、下区
午コダリヒ。さといE人の區に作乗されて

(涸沢定着 9/26 ~ 10/3)

L. 須貝 師田 岡本 片山 細野

(10/より) 渡部、川口、古橋、左山

9/26 ◎ 師田、岡本(先行パーティ) 松本から横尾まで

9/27 ● 先行パーティは涸沢までで雨のため沈殿

9/28 ○ 本隊(須貝、片山、細野) 涸沢入山

師田、岡本はグレホーン(吉野) 登攀

取付 10:40 終了 12:45 4ピッチ

取付かはっせりせず 最初ローザイル 中肉 2P グズグズ
本隊は重荷にあえいて入山

9/29 ● 沈殿

9/30 ◎ のち① B.C (5:30) - 松澤岩のコル (7:35)

こより2パーティに別れて滝谷登攀

★ クラク尾根 (須貝、岡本、片山)

取付 8:35 終了 11:60

★ 四尾根 (師田、細野)

取付 9:20 (カネタリ) 終了 10:40

その後北峰ヒコウにて合流のち、2パーティに分かれて

★ 一尾根(左) (須貝、片山、細野)

取付 12:00 終了 2:50

★ ドーム中央稜 ~ ドーム北壁(左)

中央 取付 1:00 終了 2:35

北壁 " 3:00 " 3:50

合流せず、個々にB、Cへ

10/1 ① B.C (5:50) 南稜終了から2パーティに別かれて

★ ドーム中央稜 (岡本、細野、片山)

取付 8:40 終了 10:50

★オ=尾根 P277 シェードル (須貝、師田)

取付 9:25 終了 10:55 早ルートの取付からトラバースして、

その後合流のこの雨び 21パーティに別れる

★クラック尾根 (師田、片山、糸田野) ジャンクン系経由

取付 12:40 終了 14:15

★タイヤモッドフェス本庄山の会 (須貝、岡本)

取付 12:10 ~

★2日目で事故のため登攀中止 清水山会ルートのラズル
ABSEILLEN (詳細は事故報告書)

合流のこのBCA 16:00 着 渡辺AS(4人)入山

10/2 ①-②-③ 冷たい強風の中を南稜に登ると渓谷は一面ハル
グらがはれ、雪が舞う。で、渓谷登攀を中止、東稜のゴジラ
をルックの練習をしながらBCA、のりシカ殿

10/3 ④ 雨のため明日の下山を待たず下山。(師田は涸沢に残り
4日下山)
—感想—

★天候に恵まれず思い通りに登れなかったので、いくつかのルートを
やり残してしましたのは残念な気がする。雨風はとてつもなく、もう
2,3本 渓谷で登りたかった。ガイルルックの練習をしたが、あれ
は夏合宿で不明確だったことを、明白にさせてくれてよかった。
それから、1年とガイルを結んで思ったことだけと、今年の
年月はボウ弩の時と較べて、1111意味でも悪い意味でも
岩を怖からないな、と思った。 — 師田 —

★D級ピッチの片鱗しか触れられなかったのは今後には
~~課題~~課題を残したが、フリークライムにも慎重に目をつけ
ればはらなれと感じている。

雨にたたられたが、余裕のある生活だったことは、長さをま
らわすのを助けてくれた。Tent内の整理など、窮屈な
冬に向けて心しておきたい。

—岡本—

★ 滝谷登攀が面白かった。

—片山—

★ 滝谷での一服は実にくうまり。

実に快適で楽しかった。

—糸田野—

★ リーダーのお言葉

天気に恵まれず、あまりトレースできなかったか
一年生はたいたい消化できた。

しかし、我が部で芽ばえてきた、危険な
傾向が、この山行で表面化したことは、
残念である。

生活面にはじまり、生死を左右している
登攀においても、その甘さが、指摘され
ていた段階で追求されたたいである。
危険な傾向は、たいてい、細かい事から
から見い出されたのがこの山行である。
我々は、そのことを深く反省しなければ
ならない。

—須貝—

